

共同生活援助「風の音」令和 7 年度
地域連携推進会議会議録

1. 開催場所 社会福法人園樹会が設置運営する、びあ smile 会議室
2. 日時 令和 7 年 7 月 2 4 日（木） 午前 1 1 時 0 0 分より 1 1 時 3 0 分迄

3. 参加者

施設職員 4 名

園樹会理事長：塩澤一夫

風の音管理者：中村潤

風の音生活支援課長：村松信吾

園樹会開発課長：河野真吾

構成員 6 名

地域の関係者：戸澤清茂

地域の関係者：古屋寛

利用者：KN 様

利用者家族：森浩美

福祉に知見のある人：深澤幹雄（基幹相談支援センターりんく）

福祉に知見のある人：渡邊かおり（公認心理士）

<協議事項>

1. 挨拶

塩澤理事長より、開会の挨拶と地域連携推進会議の趣旨についての説明が行われる。

2. 自己紹介

参加者の自己紹介を行う。

3. 風の音 事業報告

（1）事業所概要（令和 7 年 4 月 22 日現在）

中村管理者より、事業所概要が報告される。事業所には男性 10 名が入居されており、年齢層は 20 代から 70 代までと幅広く、最高齢の方は 78 歳で車椅子を利用されています。障害支援区分は 4 から 6 の方が中心です。

（2）施設と地域の関係

中村管理者より、施設と地域の関係が報告される。日中活動に関しては、入居者 10 名全員が向徳舎の生活介護を利用されています。そのうちの一人については、就労継続 B 型事業所の見学や体験にも参加しているとのこと。外出については、移動支援事業所を利用して土日の外出や平日の通院を行っており、また、生活支援員の付き添いや単独で近隣の商業施設へ買い物に出かける方もいらっしゃいます。

（３）利用者の権利擁護

中村管理者より、利用者の権利擁護の取り組みの報告がある。アセスメントやモニタリングの機会に一人暮らしの意向を確認していますが、現在その希望を表明されている方はいません。虐待や身体拘束については、これまでに確認されておらず、年に一度、利用者にも理解しやすい形での虐待防止研修を実施するとともに、職員に対しても動画研修等を行っています。事故・ヒヤリハット報告については、ヒヤリハットが１件（トイレの備品に身体がぶつかった事案）ありましたが、事故の報告は現在までありません。苦情や要望も特に寄せられていませんでした。

過去の重大な事案として、一昨年に利用者様が関わる交通事故が発生した件について、説明と謝罪がありました。当時、深夜に利用者様が居室から出て、施錠されていたキッチンの冷蔵庫にあるジュースを飲もうと試みましたが叶わず、玄関から外に出てしまいました。そして、駐車場の金網の隙間からバイパス道路へ出てしまい、交通事故に遭われたとのこと。この件を受け、現在は駐車場の周囲を高さ 1.5 メートルほどの金網で完全に囲う対策を講じています。現在では、利用者の方が無断で施設外へ出てしまうことはなく、職員駐車場で職員を見かけると手を振ってくれるなど、穏やかな生活が送られています。

（４）事業概要についての補足

村松生活支援課長より、事業概要についての補足説明がある。利用者の生活面に関しては、平日の朝夕と土日の三食は世話人が食事を用意しており、特に土日の昼食は利用者のリクエストに応えることも多いため、皆さん楽しみにしているとのこと。日中は向徳舎の生活介護を利用しているため、事業所間の職員同士のコミュニケーションは比較的円滑に取れています。また、外部の移動支援サービスを利用して外出や通院を行い、約半数の５名が買い物や通院のためにこのサービスを活用しています。移動支援の利用にあたっては、事業所側で本人の希望などを記した引き継ぎ書を用意し、本人の意思が尊重されるよう配慮されています。

経済面について、利用者の多くは障害基礎年金１級（月額約８万６千円）を受給しており、家賃、水道光熱費、食費、日用品費、小遣いなどの支出を差し引いても、若干の貯金が可能で収支状況にあるとの説明がありました。今後、年金額が少ない２級（月額約６万８千円）の方が増えることを見据え、その場合は就労支援事業所での収入で不足分を補う形を検討しているとのこと。これにより、保護者に万一のことがあっても利用者が生活を継続できる支援体制が構築されていることが確認されました。

さらに、当グループホームの特徴として、一般的なグループホームと異なり、障害支援区分の平均が高い方が多い点が挙げられました。そのため、夜間も必ず職員（世話人）を配置しており、手厚い支援体制を整えていることが強調されました。このような支援体制を維持しつつ、利用者の経済的な負担が増えないよう配慮していくことが今後の課題であると述べ

られました。

5. 質疑応答

Q.1（深澤幹雄様）入所から GH に移動してどんな変化がありましたか？

A.1（村松生活支援課長）入所施設からグループホーム、さらに自立した地域生活へ、という今後のステップが見えてきたと感じます。自由という意味でも、外部サービスの活用などにより、より本人の望む生活に近づけて行くことができるようになりました。

Q.2（河野開発課長）地域資源という意味では、甲府市とそれ以外で移動支援などの事業所の地域差を感じることもある。

A.2（深澤幹雄様）甲府市の移動支援サービスも潤沢といえる状況ではないが、定期的な利用は可能であるものの、生活の中で生じる不規則な外出ニーズへの対応が難しいという課題があります。現在、ヘルパーの状況調査を進めており、今後、より柔軟な利用が可能になるよう関係者で協力していきたい。

A.2（中村管理者）利用者様が地域で生活していくためには、様々な社会資源を整え、地域の方々の理解と協力を得ることが不可欠であり、そのためにこうした会議が重要だと考えています。

議事録作成者 河野 真吾